

論文の要旨

論文題目 20 世紀中国におけるイプセン受容史上の魯迅と胡適
氏名 陳 玲玲
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 19 年 3 月 23 日

魯迅と胡適は中国現代史の上で文化的偉人と言える。彼らが中国の未来の道を見つけようとしたとき、イプセンが彼らの視野に入った。イプセンは洗練された演劇の手法を用いて、より現代的な思想を表現し、近代劇を確立した「近代劇の父」である。しかし、20 世紀前半の啓蒙時代において、魯迅と胡適は期せずしてイプセンの個性主義、精神解放、および軌道破壊の思想を武器にして、暗い中国旧社会に挑んだ。本研究では、20 世紀中国のイプセン受容史上において魯迅と胡適を比較する。具体的に、魯迅のイプセン像と胡適のイプセン像との間に、いったいどんな異同があるのか、二人がイプセン受容史の中でそれぞれどのような役割を演じたのか、またその場合の歴史的な原因の究明を行う。本研究は九章の構成をとり、各章の要約は次のようである。

序章では、本研究の研究背景、研究対象、先行研究および研究目的、研究方法を述べた。

第一章では、まず留学期魯迅のイプセン受容の内容を考察した。留学期の魯迅にとって、イプセンはキルケゴールの解釈者であり、ニーチェと共に意志の力を有し、世俗に反抗する代表である。魯迅は『国民の敵』のストックマンのような人間を高く評価する。彼は「個性的」態度、優秀な中国知識人として持っている中国伝統文化精神によって、明治時代のイプセン・ブームから個人主義者のイプセンと世俗に対する反抗者のイプセンを読み取っている。彼は明治の時代精神に気づき、民族的な精神の重要性を認識し始めている。魯迅はまさしく伝統的憂患意識（社会的責任感）と士大夫としての指導者意識により「人々の精神を改革」し、「人間の国」を建設しようとした。それ故、魯迅は、理想の人格が備わっているストックマンのようなイプセン像をうち立て、またこのイプセンを手本にしている。他方、伝統的文化の士大夫的な性格により、魯迅は、日本において同様に流行していたイプセンの『人形の家』のなかで、ノラの家出という行動における叛逆性、戦闘性、新しい女性の価値をまだ認識できなかったと推論した。

第二章では、五四時期以来魯迅のイプセンに言及した文章、および関連の作品を分析して、魯迅のイプセン像の全容を、またその全容の背景にある原因を追究した。魯迅の生涯を貫いているイプセンについての認識は、日本留学時代において形成されたく人間

の精神を改革する>という目標に基づいていると言える。また、魯迅は五四新文化運動における啓蒙の具体的な要求によって、極めて深刻にイプセン思想の精華を活用して、中国の社会問題を研究、探索している。五四時期における魯迅は、まずストックマンのような先覚的意識を持つ力の存在を呼びかける。続いて、イプセンの発見した精神遺産から啓発されて、魯迅は中国人の精神が重い歴史にねじ曲げられ、窒息してしまう苦痛を感じ、そのため進化論の楽観にもとづいて、子供本位という提案を出す。また、ノラ・ブームを代表とする、情熱があっても理性に欠けがちな女性解放という時代の旋律に対して、魯迅はもっと冷静であり、さらにイプセンの本質を捉えて、その女性解放という主題を<人間の精神解放>に取り入れる。また、20年代末から30年代にかけて、革命文学論争の時期において、魯迅はマルクス主義を受容し、進化論および個人主義を克服して、イプセンを新しく認識しようと試みる。残念ながら、その結果は現れていない。そのかわりに、魯迅はイプセンの中国における伝播史を簡単明瞭に総括したと言える。

第三章では、劇作家ではない魯迅が脚本の形式で残した作品「過客」（散文詩集『野草』所収）、「起死」（歴史小説集『故事新編』所収）とイプセンの劇作品を比較した。この二つの作品とイプセンの劇と比べてみれば、「過客」とイプセンの処女作『カティリーナ』、「起死」とイプセンの最後の作（三幕の劇的エピローグ）『あたしたち死んだ者が目覚めたとき』が対応している。「過客」と『カティリーナ』は以下六つの類似点が存在している。①象徴の手法を使う。②「前方の声」と「魂から一つの声」の象徴の意味が同じである。③対立する人物を設定することと、人物における象徴の意味。④背景における相似点がある。⑤作家の主観的感情が濃い。あるいは作家の自省精神が深い。⑥深い文化の意味が含まれている。他方、「起死」は魯迅の最後の創作だと言える。「起死」と『あたしたち死んだ者が目覚めたとき』において、魯迅、イプセンはいずれも創作の終点で期せずして生死という重大な問題に関心を持ち、登場人物には最終の創作のなかで深い自省、自己批判の精神が表れている。

第四章では、魯迅の、イプセンと関係がある短編小説「傷逝」（1925）とイプセンの問題劇『幽霊』とを比較して、魯迅におけるイプセンからの影響を追究した。表面上では、「傷逝」は、五四運動時期イプセンブームに影響を受け、胡適の「終身大事」（1919）以来、もう一つの中国版の『人形の家』であり、ノラの運命を表現している作品である。しかし『人形の家』よりも、「傷逝」とイプセンの『幽霊』の二作には、共通の主題があるように思われる。「傷逝」において、魯迅は自分の主題——「喫人」あるいは「食人」という主題を継続して、イプセンと同じように、中国人の心の中における<幽霊>を捕らえようとした。また、「傷逝」は『幽霊』に似ているところが少なくない。とりわけ涓生とアルヴィング夫人の間に、相似が見られる。例えば二人は、①それぞれのプロットの中で、語り手を担当する。②事態展開をリードする。③二人とも、新旧二つの文化の産物である。④自分が「卑怯者」なので、真実を言い出す勇気がない、等等。それにもかかわらず、「傷逝」のなかにはぎこちない模倣がなく、中国においてイプセン

の影響をうけつつも、独立して創作された優秀な作品になっている。

第五章では、胡適の「イプセン主義」(『新青年』第4巻第6号、1918.6)のテキストを考察して、また胡適のそのほかの文章を参考にして、彼のイプセン主義という人生観の特徴を追究した。胡適の「イプセン主義」は中国において初めて、イプセンについて全面的に紹介する文章であり、その中で、イプセン主義は写実主義を基礎とする個人主義によって構成されると概括している。胡適はこの人生観としてのイプセン主義を「健全なる個人主義」とはっきりと指摘している。それは、胡適のアメリカでの留学期間に形成されたものである。しかし、人生観としてのイプセン主義は、中国儒家の「修齊治平」(「修身齊家治國平天下」の略語、陳注)というような文脈が読み取れ、イプセンを胡適は個性的に、中国風に読解することになった。それゆえ、それは五四時期の知識人に広く認められたのである。

第六章では、胡適が『人形の家』の模倣作品の「終身大事」を通じていかなる<イプセン主義>を表わそうとしたのか、また、イプセンの中国での伝播においてこの劇作品がどんな役割を果たしたのか、これらの点を追求した。「終身大事」は中国話劇最初の作品であり、イプセンの写実主義の精神に従って、批判の矛先を家庭の罪に向ける。「終身大事」は婚姻問題の裏にある、中国の法律、宗教、道徳などの文化的問題、すべての文化的根源に批判的に触れる。一方、胡適は「終身大事」を通じて中国におけるイプセンの『人形の家』の広告を作り、イプセンの個人主義、人間解放および近代的演劇(社会問題劇)という芸術形式を中国に輸入した。「終身大事」は世に問われてから、イプセンの『人形の家』の中国版として、女性問題、あるいは女性解放について始めて提起したものであり、さらに当時の中国文学界に与えた影響は、『人形の家』の訳本よりいっそう強かった。そしてそれ以後、イプセンは中国で「女性解放」という旗の指導者として位置づけられ、長期間、「女性解放」というこの狭い領域においてもちあげられた。

第七章では、精神、気質、文化背景などにおいて胡適と相似する新月派の劇作品を論じた。胡適は一幕劇「終身大事」を試作して、イプセンの中国への影響を興起する重要なきっかけとなった。しかし、彼の創作の才能は優れたものではなく、さらに深く新しい劇理論を実践できなかった。新月派の丁西林の「一匹の蜂」、「压迫」、余上_レの「軍隊の反乱」、「塑像」、徐志摩、陸小曼の「卞昆崗」、欧陽予倩の「潘金蓮」、袁昌英の「孔雀東南飛」を分析して、①写実主義の傾向、②家庭の罪を暴露する、③新しい女性の形像を描き出す、④登場人物の関係の設定、などの共通する四点を明らかにした。このことによって、胡適の「イプセン主義」と「終身大事」が新月派の演劇へ影響を与えたことを推定できる。また、新月派はイプセンの象徴劇、心理劇にも関心を持って、象徴、心理分析の技法を試み、劇の優れた言葉をうまく用いて、面白く、美しい芸術的な演劇を創作している。この点において、それは胡適を超えると言える。

第八章では、国劇運動を胡適の発起した「国故の整理」運動という背景のもとにおき、

国劇運動におけるイプセンの再認識の仕方、および『新月』のイプセン号の特徴を分析することを通じて、新月派とイプセンの関係を追究した。国劇運動は中国話劇史の早い時期に、欧米留学経験がある余上_一、聞一多、徐志摩等の新月派メンバーにより、1925年から倡導、発起された。それはより系統的、専門的な演劇についての研究活動である。彼らはイプセンの芸術性を重視している。国劇運動、『新月』の『イプセン号』の検討を通じて、『新青年』の『イプセン号』においてただイプセン思想を強調する問題劇を改めて考え評価することは、イプセンの芸術性を認識するために、道を開く意味がある。新月派は胡適の「問題の研究」「学理の輸入」「国故の整理」「文明の再造」という文化構想の下で、中国現代国劇を研究し、イプセンを代表とする西洋演劇の理論を輸入し、旧劇を整理して、新しい現代演劇の文明を打ち立てようとする。しかし、20世紀20年代において、新月派の芸術性を強調する理想も当時の社会に適合できなかった。国劇運動は、歴史の埃のなかに覆われてしまった。

第九章は、結論である。その第一節では、胡適の「イプセン主義」と魯迅の「ノラは家出してどうなったか」を比較した。胡適は、外部世界が人間に影響を及ぼすこと、また家庭、社会、さらにすべての文化が個性発展を制限すること、を痛感している。魯迅は人間の精神世界（あるいは内部世界）に入って分析する。例えばそれを言うこと、夢を見ること、忘却ということ、観客の心理など、これらはいかに人間が自分の傀儡の本質を意識することを阻んでいるのか、あるいはこれらはもともと傀儡の表現である、ということを示す。そのために、人間が内部からねばり強い闘争精神を育て、自ら目覚めて自由を勝ち取るように努力することの重要性を指摘し、同時に心から他人が自由を勝ち取るために自ら犠牲になろうとする。このようであるならば、中国の活路を開く可能性があると考えられる。胡適は制度および体制を整備し形成することを重視する。胡適はアメリカの民主主義制度における自由の空気を身をもって味わった。そのため、イプセン主義、具体的にイプセン劇作品における写実主義によって、外部社会を批判するという助けを借りて、中国人が社会の暗黒を認識し、批判することを目指す。それによって、個人主義に基づく民主主義制度を形成するようになることを指摘する。魯迅はイプセンを、ニーチェとキルケゴールのような主観意志を強調する哲学者あるいは思想家の系譜において理解する。魯迅は、イプセンの劇作品のなかで、大衆が古い規則と悪い習慣に陥り、それを繰り返しているうちに当たり前になる現実生活に対して、個人が戦い、個人の解放のために行った精神の闘争を激賞する。

その第二節では、胡適の「終身大事」と魯迅の「傷逝」を比較した。胡適は「終身大事」の中で、勇気と知恵によって、中国の封建的婚姻制度における非人間性、およびその文化の根源を掲示している。しかし、「終身大事」の楽観的な結果によれば、まるで旧来の婚姻制度をつぶしてしまえば、自然に人間を解放できるかのように思える。実際は人間を解放するのは、胡適の想像よりさらに困難で、並大抵ではない任務である。魯迅は「傷逝」のなかで、封建的婚姻制度を突き破った人間が、自分自身をそれによって

解放できないという現実を写實的に描いている。胡適は「終身大事」のなかで積極的な面から、個人主義の思想（自由意識の覚醒）と車、電話、鉛筆などの物質的な手段と、どちらも重要であると肯定している。それに対して、魯迅は「傷逝」のなかで反面から、思想と物質とともにまだ欠乏する中国の現実において、ねばり強く戦うことと愛のために犠牲になることと、どちらか一方を捨てるわけにはいかない、と指摘している。

胡適の「終身大事」はイプセンの『人形の家』のために、中国において広告を作り、イプセンの個人主義、女性解放、および現代演劇（社会問題劇）の形式を中国に導入した。それは文化を伝播することだと言える。魯迅はイプセンが『人形の家』のなかで提出した問題を考え続けて、イプセンと同じように文学の領域において人間の心を探索し、運命を揭示し、そして精神の古い偶像をすべて一掃しようとしたりする。

その第三節では、20世紀中国におけるイプセン受容史上で、胡適の文化伝播と魯迅の呼応の仕方をまとめた。胡適は「イプセン主義」と「終身大事」を通じて、イプセンの劇作品を思想から様式までほとんど全面的に中国へ伝播しようとした。また、新月派のメンバーは胡適とともに欧米での留学経験があり、欧米（主に英米）文化に親和的な態度を持ち、それによって、中国現代の演劇に一つの重要な手本としてのイプセンの劇作品を共同で紹介、伝播する。

魯迅は、胡適のようにイプセンを中国の現代文学の手本として、自己の文学を作るのではなかった。魯迅とイプセンと似ているところは次の三点である。第一に、広義の哲学および政治の思想領域において、魯迅の<己>についての認識、初期における士大夫意識に基づいての民衆観、および無政府主義などが、イプセンと似ている。第二に、魯迅の文学の起点としての立人思想、即ち人間の精神を改革するという考えは、イプセンと期せずして一致している。第三に、彼らの書いた問題の裏に隠された、暗黒の奥底に流れている<愛>の吟詠である。そのために、魯迅は中国においてイプセンの思索に深く共鳴し、呼応している。またこの呼応の仕方によって、草分けの時代における中国現代文学はひたすら幼稚に模倣、追随することを避けることができた。さらに、世界の現代文学に呼応することができ、漢民族の特色を持つ作品を世界に捧げることができた。また、付録1では留日期における魯迅のイプセン受容の文化背景、即ち明治時代のイプセン季節を紹介する。付録2は「イプセン略年譜」である。付録3は「魯迅胡適比較略年譜」である。